能登町立鵜川中学校

１　本校の教育目標

夢を持ち、意欲的に学ぶ生徒の育成

２　研究主題

他とかかわりながら，自分を高めようとする生徒の育成

～　授業における充実した言語活動をめざして　～

３　「研究」の方針や体制、計画の前に

・ 一斉指導が基本であることを認識し、そのうえで小集団活動を効果的に取り入れる。
・ チャイムとともに授業を始めチャイムとともに授業を終える。
・ 授業中にノートをとらないなど、やる気を見せない生徒に対しては必ず１度は声をかける。
・ 授業の始めと終わりの挨拶は、椅子を机に入れて、前をしっかり向かせる。
・ 支援が必要な生徒への配慮をする。チョークの色に気をつける、教室前面の掲示を少なめにするなど。その他有益な情報があれば共有する。
・ 授業に音読の時間を入れる。
・ 宿題を提出しない生徒に対しては、なるべく締め切りの延長を認めない。
・ 計算コンテストやスペリングコンテストは全校一斉で取り組む。
・ 自習時間は、一切しゃべらせず、黙々と勉強させる。けじめをつけさせる。

４　研究の方向と方法

（１）方向

① 国語科を中核とした言語活動を充実させる。
② 小集団活動を効果的に活用する。
③ 「教師の言語活動」※ の改善に取り組むとともに、特別支援教育の視点を生かした指導技術を身につける。

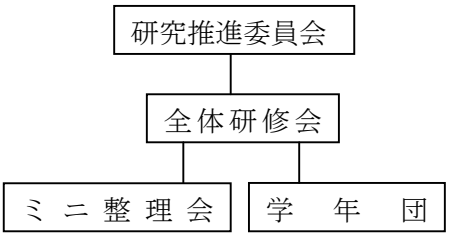
※「教師の言語活動」とは・・・授業をはじめとする学校教育活動においては、発問を工夫したり生徒とのやり取りを効果的におこなったりする技術が必要である。本校では、その技術がどんなものであるかを追究するとともに、その習得を目指している。

④ 抽出児を基軸とした授業の組み立てを工夫する。
⑤ 授業の準備や振り返りをたしかなものにするために「授業ノート」を活用する。

（２）方法

① 一人年３回以上の授業公開の他、自主公開を推進し、教科の壁を越えて参観する。
② 全体研修を核にしながらも、ミニ授業整理会などを積極的におこなうことで研究と研修の日常化を図る。
③ 研究主題に連動した個人研究テーマを設定し，取り組みの成果をレポートにまとめ交流する。
④ サポート研修の活用など外部の識者から積極的に学ぶ。

５　研究組織について



《研究推進委員会》

・研究全体の状況把握と方向づけ
・研究推進の計画・立案・検討、各部の調整
・授業研究計画の立案、授業整理会の運営、今後の課題の提起
・学校内外への情報の発信

《全体研修会》,《ミニ整理会》

授業整理会の他、次の事項をあつかう。

・個人研究テーマの進捗状況の報告　　・先進校視察報告
・教育理論の学習　　・成果の検証

《学年団》

・担任と副担任の両者が、相互にあるいは共同で道徳の授業を担当し切磋琢磨することで、授業づくりの基礎を養う。
・それぞれが，学年として取り組むべき課題をつうじて研究・実践した内容を職員全体に発信することで日常的な研修の一環とする。

６　個人研究テーマ

栂　（外国語）	Writing の能力を伸ばす授業をめざして
柿平（国　語）	国語科を中核とした言語活動の充実
中社（数　学）	生徒の思考を深める授業展開のあり方
東出（理　科）	学びあい、考えを深めることができる発問の工夫とノート指導
久田（特別支援）	個に応じた、「やった！できた！たのしい！」がある授業づくり
道浦（美　術）	他の作品の鑑賞も取り入れ，高まりを感じる授業をめざして
山下（社　会）	学びあいと高めあいを目指した発問・指示の工夫
吉延（保健体育）	運動の正しい行い方を意識させる授業の工夫

７　具体的な取り組み

学校研究の推進と個人研究テーマとを関連させながら２２回（１２月末現在。今後も引き続き実施予定）に及ぶ公開授業をおこなってきた。以下はその実践の一部の報告である。

（１）国語科を中核として、言語活動を充実させる試み

必然性のある話し合い（討論）によって物事を多面的・多角的にとらえさせようとする授業は、数多く実践された。ここでは、数学科のレポートからの抜粋を掲載する。

「自分の考えを説明できる」＝「理解している」と仮定・実践

① 数学科実践レポート

１　題材名　１時関数の求め方（章のまとめとして…２年生・１０月）
２　目　標　あたえられた条件を満たす１次関数の求め方を説明できるようにする。（見方・考え方）

３　学習の流れ

①　課題をつかむ。１次関数の式の求め方を説明しよう。

②　３つの条件の中から選択し，自分の意見を持つ。

③　同じ条件を選んだもので構成する小グループで考えをすり合わせる。

④　グループの考えを説明しあう。

⑤　お互いの説明に対して質問や評価をする。

４　学力向上プランとの関係（カッコ内の数字は「いしかわ学びの指針」との対応）

・言語活動を充実させ、根拠や筋道を明確にした表現活動を指導する。（→１）

・小集団活動を活用し，多面的･多角的に思考したり自分の考えを深めたりできるよう指導する。（→２）

５　成果と課題

成果・各グループ（３班＋別解１）とも自信に満ちた表情で伝え，納得したと自己評価していた。

・説明にメリハリをつけているグループの発表を先にした。求め方の「説明の仕方」に不可欠な事項と不要または簡略化できる項目を区別しようと試みていた。

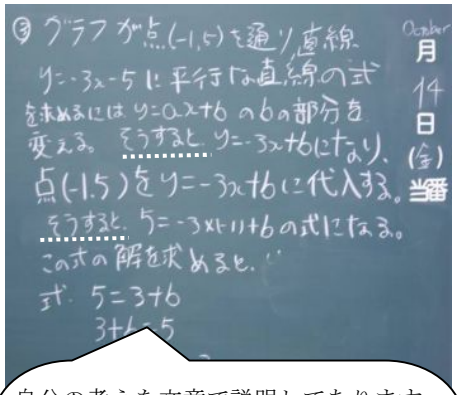
・展開③で，生徒Ａの説明（この時点では考え）がＢを動かしまとめていた。説明ではＢが無駄を省いて的確に説明をすることができた。（２人の小グループ）

・中間テストでの該当問題の通過率はのべ４０問中３０問（７５％・・・教科の平均は６６％）

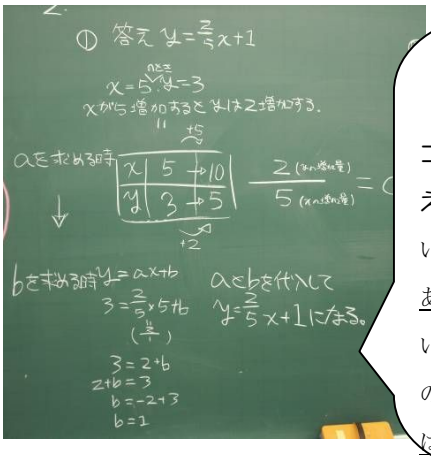
課題・考えを順序立てて話すときの接続詞（下図破線）は，伝える技術として教えておく必要がある。

・自分で解けると思う問題を選択させたが，自力で解決出来なかった生徒が４名。助言で何とか答えを出していたが，うち２名はグループ内で積極的に意見を言う姿が見られなかった。これは自信を持てないことと説明する時間を授業で計画的にとっていないことが原因と考えられる。

生徒の板書と教師のコメント（後にプリントにして配布）



自分の考えを文章で説明してあります。読むだけで意図が伝わってきますね。また後半は１次方程式を解くことを使って説明を簡略化しています。このように既習の事項を利用するときは，さらりと流すほうが大切な部分がはっきりとするので効果的です。



「ａを求める時」や（ｙの増加量）といったコメントがポイントを押さえるのに役立っています。いいですね。数学の武器である表や式をうまく使っています。できれば「ａを求めるときは，変化の割合の式から２／５になる」といった文章の説明があれば初めて読む人にも伝わりやすいでしょう。

②　その他

小学校時から国語科で取り組んでいる作文形式「はじめ・なか・あと」を英語科（英作文）の学習で生かした実践も報告されている。

（２）教師の言語活動を改善する試み

教師の言語活動には諸相あると考えられるが、次の二つに大別できよう。

〇発問や指示など・・・学習の目標や生徒の実態にてらして適切に表現する。的確であるのはもちろん簡潔かつブレのない表現が求められる。

〇生徒とのやりとりにおける受けと返し・・・瞬時の分析力と判断力、表現力が求められる。学級や生徒の個性ばかりでなくその場の雰囲気をも踏まえながら、その時々にふさわしい対応と表現が求められる。この力をつけるためには、次の２つが基本になる。

・深い教材研究　・深い生徒理解

この２つをベースとしながら、生徒の反応をできるだけ予想する。そして実際の授業ではその予想がどうであったかということを、真摯に検討するという経験を積む必要があろう。

いずれも言語の活動ではあるが、音量や声色をはじめとして、表情や身振り手振りなどの身体表現、板書や掲示物等とも密接にかかわる、総合的な表現力に磨きをかけていきたい。

● まず<u>発問や指示の視点</u>から、理科のレポートおよび国語科の音声記録の抜粋を掲載する。

① 理科実践レポート

１　実施学年と実施日　　１年生　　９月１３日（火）４限目

２　小単元名　　１章　光による不思議な現象

３　目　　標

・見えなかったコインが、容器に水を入れることにより見えてくる現象に興味をもち、進んで調べようとする。〈興味・関心〉

・光の性質を意識して作図できる。〈技能〉

４　学力向上プランとの関係（カッコ内の数字は「いしかわ学びの指針」との対応）

予想する光の進み方を作図し、それをもとに説明する。（→１）

５　学習の流れ

①導入　　コインから出た光が目に届くまでを確認する。（光の直進性）

②課題把握

グループで実験。（小集団活動）　水を入れるとコインが見えるようになることを確認する。

見えないはずのコインが見えるようになった理由を、光の性質から説明しよう。

③予想する　　水の中のコインから目に届く光線を予想してノートに作図する。

④確認する　　光が水と空気の境界面で曲がったことを確認する。

⑤演示実験　　水中から空気中にむかって光が進む道すじを調べる。

⑥まとめ　　演示実験からわかったことをまとめ、課題の現象にあてはめて考える。

６　成果

・興味を引く現象を先に見ることで、課題に対する<u>目的意識を持つ</u>ことができた。

・予想する際、図を通して考えることで、光の道すじを<u>根拠をもって説明</u>することができた。また、<u>学習した内容</u>（水面への<u>反射</u>、容器の壁による<u>反射</u>）を使いながら考えることができた。

・文章化する際の書き出しを指定することで、<u>相手を意識する表現</u>ができた。

・他の生徒の発表を聞く際、自分の考えと比べながら聞く様子が見られた。
・発問を小刻みにすることで、思考を整理し、課題をより明確にできた。このことから、光の進み方についてより深く考えることができた。
例）発問１：直接コインが見えるのはなぜか。→発問２：容器に入れると見えなくなるのはなぜか。→発問３：どうして、水を入れると見えないはずのコインが見えるようになったのか。

取り組ませたい課題が明確になっており、さらに課題に迫るための発問を小刻みにするという工夫が施されることで、学習目標への到達が可能になった。

② 国語科授業記録（１１月１４日　２年生）

発問や指示がすっきりしていないものもある。次は国語科授業の音声記録である。漢詩の内容読み取りが終わり、つぎの課題として「個人の感想をまとめよ」という指示である。

T　はい、じゃあ、はい、今までもね、え～、詩の感想を書いてきましたけども、え～、感想を書いてもらいましょう。（板書）感想ね。で。（板書）まず自分の感想を書きましょう。そうですね、５分にしましょう。はい、みんな（板書写しを）書き終わるまで、確認してから。
S　感想か～。
T　はい、じゃあ、感想を書くときの注意なんですけども、あの～、ちゃんとね、今まで勉強してきたんだから。教科書で勉強したね。教科書で勉強したね。だから、こうやって勉強ね、今日も少ししたね。その上で、これね、感想を書くんですから、ね、え～、勉強したことを踏まえて、勉強してきたことを生かして、え～書いてください。こういう表現があったから、こう思うとかね、え～、こういう場面があったからこういうふうに思うとか。他にも勉強したね。何勉強した？
S　えっと、いろいろと、あの～中国語ですか。←（音声不明瞭）
T　えっと詩のね、起承転結とかね。そういうことも勉強しましたね。そういうのも生かしてね。はい何か質問ありますか。ないですか。じゃあ５分間でやります。

発問や指示がすっきりしていないだけではなく、早口であることも欠点の一つである。必要な情報を伝えようとして、かえって生徒にはわかりにくいという状態を生んでいる。改善が求められる。

● 次に生徒とのやりとりにおける**受けと返しの視点**から、先の国語科授業での別の場面の記録を掲載する。前時の復習場面である。

③ 国語科授業記録（１１月１４日　２年生）…②と同じ授業

T　それから。
S　然えん。
T　然えん。

S_1　燃えん。　S_2　燃えん。
T　燃えんと欲す。それ，何色でしたか。
S　赤。

T　赤ですね。合計四種類やね。こんなにたくさん色が使われているんで，どんな印象が出ているんでしたっけ。
S　華やか，明るい。
T　華やか，明るい。それから。
S　明るい。
T　さっき出ましたけどね。華やか，明るい。
S　鮮やか。
T　鮮やか。ほ～ん，そんな感じやね。
S　きれい。
T　きれい。ん。いっぱい出るね。ほーん、すごい。ほんだけでももう四つも言葉出てきた。すごい。ね，え～、そういうふうな雰囲気やったんやね。で，これ前半やね。で，後半どうなる？
S　暗い。どよ～ん。
T　どよ～ん。
S　暗くなる。
T　そおやね。なんでどよ～んとなる。
S　帰れないから。
T　帰れない。どこへ帰れない。
S　故郷。
T　故郷へ帰れない、ね。ぐっと落ちるんやったね。

教師は、生徒の発言をそのまま繰り返している。自分の考えをまとまった形で表現する能力はこのやりとりではついてこないであろう。ところがこのようなやりとりによって、知識の定着度を断片的に確認しようとする授業がいまだ一部に続いており、改善が求められる。

8　成果と課題および今後の研究について

１月末に職員アンケートを実施したところ、次のような傾向がうかがえた。

・小集団の形はとれるが、深まりのある学習に結び付けるといった活用ができていない。
・「教師の言語活動」を意識することができた。
・小さな技術ではあるが、特別支援教育の視点から学んでいるものもある。
・抽出児をおおむね意識できている。
・授業公開は効果があった。

★ ☆ ★ ☆ ☆ ★ ☆ ☆ ☆ ★ ☆ ☆ ☆ ☆ ★ ☆ ☆ ☆ ★ ☆ ☆ ★ ☆ ★

このアンケート結果をもとに校内研修を実施した。話し合いの結果は次のとおりである。

○ 「『言語活動』を充実させ、根拠や筋道を明確にした表現活動を指導する」という目標は今後も継続していく。
○ 研究の方向とその方法を整理することで、研究に取り組みやすくする。（→本稿の「４　研究の方向と方法」）
○ 授業整理会の柱を次の２つとする。
・教科の目標が達成できたかどうかを判断基準に、言語活動の成否を検討する。
・抽出児を設定し、「教師の言語活動」および教科目標が達成されたかどうかの指標とする。
ただし、この柱だけに縛られることなく、これまでどおり闊達に意見を交換し合う。
○ 「教師の言語活動」を磨く。
○ 奥能登スタンダードの理解と活用について研修を深めていく。

★ ☆ ★ ☆ ☆ ★ ☆ ☆ ☆ ★ ☆ ☆ ☆ ☆ ★ ☆ ☆ ☆ ★ ☆ ☆ ★ ☆ ★